

東京東部中世銭貨の特性分析

The characteristic analysis on the medieval coin in the eastern Tokyo

ME23 富田 康介

指導教員 山館 順 准教授

1. 緒言

中世社会の各地域における物流や銭貨の流通については文書史料のみでは未解明の部分があり、この分野において、より具体的な手がかりを得ることが本研究の目的である。

本研究では葛飾区の葛西城から出土した16世紀の銭貨の分析を通して、東海道の物流、当時の葛西城周辺の社会状況を考察した。

2. 研究のアプローチ

葛飾区郷土と天文の博物館から拝借した16世紀の葛西城出土の中世銭貨を蛍光X線分析装置によって成分分析を行った。

蛍光X線分析装置とは、測定試料にX線を当てることで発生する蛍光X線の波長を測定する装置である。元素によって蛍光X線の波長は異なるため、蛍光X線から成分分析を行う。サンプリングした古銭の統計データを用いることで歴史的背景の考察につなげていくことが可能となる。

昨年度の研究では各地域によって出土した銭貨の特徴、時代背景の相対的な比較を行ったが、今年度は各遺跡の性格把握のために単独の遺跡の調査を行った。

3. 結果

表1 永楽通宝の含有成分

資料番号	含有成分(%)			
	Cu(銅)	As(亜鉛)	Sn(スズ)	Pb(鉛)
17	72.1	5.60	9.21	13.1
34	71.9	6.16	8.73	13.2
36	86.4	2.80	4.66	6.11
188	78.9	3.95	6.79	10.4
109	78.9	3.32	10.2	7.61

表2 洪武通宝の含有成分

資料番号	含有成分(%)			
	Cu(銅)	As(亜鉛)	Sn(スズ)	Pb(鉛)
015	81.4	2.83	9.94	5.87
168	82.0	2.89	8.36	6.76
178	69.6	3.78	18.2	8.43
172	76.0	4.63	9.54	9.85
055	77.6	4.41	7.32	10.6

表3 宣徳通宝の含有成分

資料番号	含有成分(%)			
	Cu(銅)	As(亜鉛)	Sn(スズ)	Pb(鉛)
051	79.2	3.26	10.0	7.55

4. 結論

永楽通宝、洪武通宝、宣徳通宝のいずれも銅の含有量がほぼ70~80%の中に納まっており、質の高い貨幣が多いことがわかる。これらの貨幣は呪術目的に墓に副葬されたものではなく、実際の流通貨幣として使用されたものであることを指摘する。

銅の含有量の偏差がほぼ10%内におさまっており、地元の支配者による貨幣の政策、流通政策が貫徹されていることを示す。以上のことから銭貨の埋納主体は葛西城周辺に強い影響力をもつ葛西城主であると想定できる。また、城は16世紀の在地勢力による経済政策の拠点であったと想定できる。

5. 今後の発展

従来の研究で16世紀の葛西城と小田原との間に文化的な交流があったことが明らかになっている。具体的な物流の根拠となる出土品として、小田原北条氏の手づくねかわらけやロクロかわらけなどが葛西城の井戸から出土していることがあげられる。土質の成分から小田原から直接搬入されたかわらけではなく、小田原のかわらけを模倣して在地で作られたと思われるかわらけも出土している。このことから小田原北条氏と葛西城周辺地域との経済的交流の調査を今後の検討課題とし、葛西城出土銭貨と16世紀の小田原城周辺の出土銭貨との比較検討を行っていきたい。[1][2][3]

文献

- [1] 東野治之, “貨幣の日本史,” 朝日新聞社, pp.53-54, March.1997
- [2] 竹島いわお, “葛西城とその周辺,” たけしま出版, pp.160-161, May.2001
- [3] 宮田哲男, “葛西城と古河公方足利義氏,” 創生社, pp.53-54, May.2010